

汎用能力と専門能力を結びつける体験型学び 社会との双方向的な授業の試み

上智大学総合人間科学部心理学科
藤山直樹
横山恭子

心理学演習ⅡA

心理学教育のなかでの位置づけ

- 心理学科2年次の必修科目。
- 2人の教員と1人のTAによって担当される。
- もともとこの授業は心理学の専門教育の重要な要素として構築された心理学演習シリーズの一環である。
- そういう意味で、この科目はもともとは純粹に心理学教育の重要なコースの一部、「心理学者」アイデンティティの形成に向けた教育の一環である。
- 上智大学心理学科では、講義、演習、実習の三つを心理学教育の要素としているが、とりわけ演習科目と実習科目はすべて必修となっており、学生にとって単位を取得しないと次のステップに進めないという縛りがかかっている科目である。

心理学科の演習科目

● 1 年春学期の演習Ⅰ A、1 年秋学期の演習Ⅰ B

定評のある英語の心理学教科書（全世界の大学で心理学の入門教科書として汎用されている）を自宅で読んできて、グループに分かれて、内容のプレゼンテーションと討論して討論。2 人の教員と多数の T A がグループを巡回してファシリテートとする。

● **2 年春学期の演習Ⅱ A**：これが今日の主題である。

2 年秋学期の演習：英語で文献を読んで討論する授業

ここまでの演習単位と実習（心理学研究法実習：2 年次春秋必修）単位を取得していないと、演習Ⅲは受講できない。

● 3 年春学期の演習Ⅲ A、3 年秋学期の演習Ⅲ B

いわゆる「ゼミ」である。各教員の領域によって相当に違う内容のゼミが開講されており、学生は最低 1 つ、通常は 2 つのゼミを受講する。

● 4 年春学期の演習Ⅳ A、4 年秋学期の演習Ⅳ B

いわゆる「卒論ゼミ」である。

専門科目としての心理学演習ⅡA①

●シラバスの「概要」の記載

「この演習の柱は四つあります。心理学を学び、研究することに必要な知をどのように検索し獲得するかを学ぶこと。**面接**によって心理学的知を引き出す最初の経験をすること。さまざまなやりかたで得た知をように**他者に公共的になるように発表する**かを学ぶこと。**心理学を学ぶことが現実の人生とどのようなつながりを生むのか考える**こと。」

●シラバスの「到達目標」の記載

「卒論で困らない程度に文献検索ができる。

3年生のゼミで困らない程度に文献のプレゼンテーションができる。

ひとつの研究法としての面接法を実地に体験して、人間との出会いの一回性を尊重しつつ、インタビューができる。

インタビューで起きたことを生気を失わずプレゼンテーションできる」

専門科目としての心理学演習ⅡA②

●具体的な内容

1回目：オリエンテーション（内容の説明、動機づけを高める短いレクチュア）

2回目～5回目 文献検索と発表を学ぶ。図書館でのガイダンスを一回。あとは8人程度の8グループに分かれて、キーワードで文献を検索、プレゼンテーション準備。

6回目～7回目 文献のレジюмеを使ったプレゼンテーションと討論

8回目～11回目 8グループ別に卒業生インタビュー準備とプレゼンテーション準備

テーマは「**心理学科で学んだということと現在の人生のつながり**」

12回目～15回目 インタビューのPPTをつかったプレゼンテーションと討論。

●設定

前もって：文献検索講習を図書館担当者と打合わせ。インタビュー対象者を卒業生の中から依頼（学科教員から推薦してもらう。専門職4名、非専門職4名）。

学期中は：毎回主教室で出席を取り、教員による短いレクチュアがあり、その後グループに分かれる（各グループにひとつ部屋を確保）。教員は一回りした後研究室で対処。TAも巡回して相談に応じる。

インタビュー直前：教員が各グループと20分ほどの面接計画のチェックをする
インタビュー後のお礼状のチェック。

●評価

出席、プレゼンテーションのファイル、個人レポート。

汎用能力という観点①

- 文献検索やデータベースに親しむことができる。
- インタビュー対象者との交渉におけるさまざまな学び

- ・メールというコミュニケーションツール

対象者の連絡先は教員が各グループの一人からメールをもらい、その人にメールする。ここでメールの書き方がまったくわかっていない学生が多い。→ショートレクチュアで扱い、対象者への挨拶メール、アポイントメント調整メールなどで実地に学ばせる。

- ・対象者との交渉

相手に敬意と感謝を維持しつつ、時間や日時の点でこちらの都合も伝えて、合理的な交渉をすることに向けて、巡回時、ショートレクチュアなどで促す。

- ・プレゼンテーション内容を同封した礼状のチェック

手紙の基本的な書き方がわかっていない学生が多い。前年度の例などをショートレクチュアで話し、書いたものをチェック。ほとんど修正が必要である。

逆にまったく紋切り型なものが礼儀だと思っていたりする。一度会った後輩たちから、お役所から来たような手紙をもらうことをどう思うか、考えさせる。

汎用能力という観点②

●インタビュー、人と会うことの準備

この講義を担当した一年目、インタビュー協力者について何も調べず、いきなりインタビューに出かける学生に驚く。ショートレクチャアで準備についてブレインストーミングしてもらうことにした。

その結果、卒論を読む、インターネットで勤務先について調べる、論文などについて検索する、というような準備をして会えるようになった。

●プレゼンテーションの能力

時間を守り、わかりやすく話ができることを促す。

「生きた」人物像の呈示と、「リサーチクエスチョン」への収斂ということの弁証法を体験させる。これはすべてのプレゼンテーションに本質的につきまとうものである。

絶えず「死んだものにならない」こと、「何のための発表かわからない発表にならないこと」をショートレクチャアで伝える。

実際の発表時の討論でもTAや教員がこの点について積極的に反応する。

こうした汎用能力について、70%以上の学生が個人レポートで触れており、「いままで考えたことがなかった」ことに目を向ける機会になっていることが窺われた。

自分の将来像と心理学科生であること 「心理学は何のためか」

このインタビューのリサーチクエスションは「**心理学科で学んだということと現在の人生のつながり**」であった。

●このことを主題にしたことによって、学生たちが学部での生活をどのような考えで送るべきなのか、心理学を学ぶことの人生での意義は何かという思索に導かれる。→個人レポートでは90%以上の学生がこの点に触れている。

●また、協力者である先輩に触れて将来のキャリア選択へのイメージを強化したり、意外なキャリアへの道を意識するようになったり、専門職志望を考え直したりする学生も多い。厚労省の心理職キャリアに会ったことをきっかけに国家公務員一種の進路を選んだ学生もいる。

まとめ

- 上智大学総合人間科学部心理学科2年次必修科目心理学演習ⅡAについて報告した。
- この科目は元来、心理学専門教育の一環として、文献検索の能力、面接法の経験、プレゼンテーション能力の育成のために企画された面があったが、社会で活躍する先輩に接触して話を聴くということ課題にしたことが、専門能力以外の汎用能力の育成、社会との双方向性の存在としての自分に開かれること、といった要素を生むことになった。これは心理学という専門科目の性質によるところも大きい。
- 汎用能力として促進できるものは、データベースからの情報の入手、社会的コミュニケーションとしての電子メールの使用能力、現実的交渉をマネージする能力、人と会うための準備と振り返りの姿勢、「生きて」いながら目的を外さないプレゼンテーションの能力などである。
- 学生は、社会にはたらきかけ、何かを入手し、その入手したことを素材に社会における自分、とりわけ未来の自分を思い描く、という社会との双方向的な体験から学ぶことができる。